寶榮座仏教講座　第７回　　令和４年４月23日（土）
講師：佐藤一道　　14：00～16：00　寶榮座

濱崎要子著『鈴木正三の精神思想』を読む。

・労働とは「ある一定の時間内になんらかの目的でおこなわれる作業のこと」
・職業とは「生活活動であり、継続的に毎日それに従事している活動のこと」
（尾高邦雄（おだか くにお）社会学者、東京大学文学部名誉教授）

鈴木正三の作務思想　『萬民徳用』にみる職業倫理

1．職業において求道的精神を追求する。
2．職業に生活倫理の形成の場と人格陶冶の場とを共に見出すことは、職業において作務精神が実践されていることを意味する。
３．禅林内で実践された作務精神は、鈴木正三を通して世俗社会における職業の勤勉精神へと発展した。
4．心の機（はたらき）を日常生活上で役立てる方便を鈴木正三は教えた。
5．徳川時代の庶民は政治的価値とは無縁のところで、日々の暮らしを支えていく精神的価値を求めた。
6．鈴木正三にとって、出家することが目的ではなく、真に求道することが目的。
7．日常生活の勤勉が他者を利する利他行と考えた。
8．鈴木正三は人間として完成をめざすことこそ、勤労の本当の意味であると考えた。
9．鈴木正三は人間の本性を自覚するための労働観。
10．人として完成をめざすことこそが職業に就く本当の意味である。

禅における労働　－　作務思想

1．求道的精神（自分とは何か。自分の苦悩はどこから来るのか。どのように与えられた命を生きたらよいのか)を坐禅だけでなく､全身心を労する労働において究明できるとした。
2．労働を行としてみる。

作務思想の成立

1．禅に生産労働の思想が成立したのは四祖大医道信（580～651）の頃。
2．中国禅は作務思想を打ち立てることによってインド禅から独立した。

作務思想の成立要因

1．民族性による要因
2．経済的要因
3．宗教的性格の要因
4．禅思想の要因

1．民族性による要因
1-1　インド禅は「思索的な傾向を持つ」老荘思想と結合した。
1-2　インド禅は、また「社会秩序の保護と合理主義」の儒教と結合した。

仏教が中国的に変容した。
・中国人の倫理観は先祖崇拝の信仰を持っていた。インド仏教は出家生活を説く。
（流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者）
・出家僧団の増大は国家の賦役を逃れる手段に使われ、民衆に不平等観。
・出家者の非現実的な不合理性に反対した。
（インドでは出家者は衣食住の問題を在家者に負わせた。中国人は拒否した）
・衣食住に責任を持つという社会的問題を突き付けられた。
・出家者による肉体労働への参加は、労働に宗教的意味を浸透させた。

2．経済的要因
2-1　初期の禅僧たちは、第三祖・鑑智僧璨大和尚の頃までは、一衣一鉢の頭陀行者。
2-2　第四祖・大医道信大和尚の頃は、雙峯山に三十数年定住し、団体生活。
2-3　第五祖・大満弘忍大和尚の頃は、何百人という僧が一山に集まっていた。

3．宗教的性格の要因

3-1　中国の禅教団は地方の山林に基盤を持った。

3-2　世俗を嫌い、時代の権力を拒否したことは禅思想の自由な独立性を確立。

3-3　社会から離れたので求道的精神が確立。

3-4　日常生活と求道的自覚の統合が必要。

3-5　この統合によって初めて人は労働を媒介とする真の実存的自覚を体得できる。

3-6　禅と老荘思想は異なる。老荘思想は超世俗的生活だが、世俗的経済基盤の上。

3-7　老荘思想に対して、禅は個人を確立して生きる自由な人間性の自覚を思想。

4．禅思想の要因

4-1　北宗禅（圭峯宗密）は完璧な形而上学的体系を築き上げた。

4-2　形而上学の限界は反動的に禅に現実の実在性を重視させた。

4-3　南宗禅は日常行為の中に禅を見出していく。

4-4　存在と思惟が分裂するところに、人間の主体的自覚はないという真実に気づく。

4-5　第六祖・大鑑慧能大和尚は得法以後も石臼差務を続けた。

5．まとめ

5-1　日常行為が修禅であるという考え方で、作務が弁道として確立。

5-2　永嘉玄覚（675～713）は「行亦禅坐亦禅」と説いた。

5-3　「厠屎送尿、著衣喫飯、困来即臥」といった日常生活が弁道。

5-4　主体と客体との二元的認識の在り方を脱却。

『百丈清規』にみる作務思想

・作務は中国禅がインド禅から大転換することを実現させた。

『百丈清規』について

・『百丈清規』は百丈懐海（749～814）によって810年頃に成立したといわれる。
・『百丈清規』は散逸した。300年後に選集された『禅苑清規』によって初期禅林の修行生活が推察できる。

『百丈清規』の成立要因

1. 出家者何百人の団体生活を維持するためには生活を律する必要があった。
2. 禅教団の頽廃に対して不純分子の増大を防ぐ規則が必要であった。
3. 禅宗は独自の戒律を持っていなかった。律院から分離する清規を作った。

『百丈清規』の特徴

1. 大小乗の戒律規範を越えて禅独自の作善門を内含した生活規範を定めた。
2. 方丈、法堂、僧堂、庫院などの建物の配置による役割規範を定めた。
3. 禅林の構成院が長老、主事、徒衆の段階的構造をもって共同生活が統制された。

作務思想

1. 大小乗の戒律を取らなかったので、インド禅が禁じていた生産労働を規則化できた。
2. 作務普請の制度は、作務普請による弁道という修行形態を成立させた。

普請（普く請する）
・行は衆に同ず、上下、力を均しくす（必ずその艱難辛苦を等しくす）　平等観。
・清規による集団生活の維持体制は、集団内に自律組織ができた。
・師家と弟子の直接的なふれあいは、和合的精神で結合された。
・大地を離れて私たちは一日も生きられない。
（正法眼蔵　恁麼　「若因地倒、還因地起、離地求起、終無其理」）